

日本英文学会関西支部

第 21 回大会資料

プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2026 年 12 月 12 日（土）11：00 より

会場：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス（〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1 番 155 号）

日本英文学会関西支部事務局

〒662-8501

兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学文学部横内一雄研究室内

E-mail: kansai2@elsj.org

会場（関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス）までのアクセス



- 1) 阪急大阪梅田駅から：阪急電鉄神戸線で西宮北口駅まで特急で14分。西宮北口駅から阪急電鉄今津線（宝塚方面行）で甲東園駅まで4分。
- 2) 阪急甲東園駅から：阪急バス（①②乗り場）で「関西学院前」下車（約5分）。もしくは、徒歩で12分。
- 3) 阪急仁川駅から：徒歩で12分。
- 4) JR大阪駅から：神戸線快速で西宮駅下車。阪急バス（甲東園行き）で「関西学院前」下車（約18分）。
- 5) JR三ノ宮駅から：神戸線快速で西宮駅下車。阪急バス（甲東園行き）で「関西学院前」下車（約18分）。

※学会当日は駐車場が使えません。公共交通機関でお越しください。

会場構内案内図



大会会場： 社会学部棟（図の 21 番）：1 階、2 階、3 階

*大会会場の社会学部棟に入られましたら、1 階社 101 教室前の大会受付にて参加者名簿にご記入をお願いします。受付は 10 時 30 分開始です。なお、当日の年会費の受付はいたしません。事前のお振込みをお願いします。

*学会当日、BIG MAMA 食堂（図の 43 番）が 11 時から 14 時まで営業しております。ゴミなどは必ずお持ち帰りください。

*急な変更が生じた場合は関西支部 HP で案内いたします。支部サイトの学会情報も随時ご確認ください。
(<https://www.elsj.org/kansai/>)

また、本大会についてのお問い合わせは学会事務局のメールアドレス（表紙に記載）までお願いします。

大会参加に伴う外部の託児サービスの利用における補助金について

本大会に参加される会員が大会当日に外部の託児サービスを利用された場合、その援助を行います。補助金の申請に関する詳細は 9 月中に関西支部 HP にてお知らせいたします。

懇親会

懇親会は関西学院会館（図の 6 番）で行われます。事前予約制。詳細は 9 月末に関西支部 HP にてお知らせいたします。懇親会参加をご希望の方は関西支部 HP をご確認の上、11 月 13 日金曜日までに手続きしてください。

*本大会は 関西学院大学「2026 年度学術集会開催補助」の後援を受けています。

教室案内図 ※ 大会受付は（社会学部棟）1階にありますのでご注意ください。

1 階 First Floor



1. 社会学部事務室 Administrative Office
2. チャペル Chapel
3. 宗教主事室 Chaplain Room
4. 多目的室 Multi-purpose Rooms

2 階 Second Floor



5. 共同学習室 Learning Area
6. 学生印刷室 Printing Area
7. 社会調査実習室 Research Room
8. 大学院研究教育施設 Graduate Rooms
-大学院生教室1, 2、院生室、院生控室-

3 階 Third Floor



9. 社会心理実験室
Social Psychology Laboratory
10. セミナールーム Seminar Rooms
11. セミナールーム2 Seminar Rooms2
12. 手話言語研究センター
Sign Language Research Center

日本英文学会関西支部第 21 回大会プログラム

日時：2026 年 12 月 12 日（土）11：00 より

会場：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス（〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1 番 155 号）

大会受付 10：30 より（社会学部棟 1 階 社 101 教室前） 受付、懇親会費納入

開 会 式 11：00 より（社会学部棟 2 階 社 201 教室）

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 横内一雄

研究発表 第 1 発表 11：10～11：50 第 2 発表 11：55～12：35
第 3 発表 13：30～14：10 第 4 発表 14：15～14：55

第 1 室（社会学部棟 2 階 社 202 教室）

司会 関西外国語大学講師 友田奈津子

1. “I comprehend All, in those mirroures of thy way and end”——John Donne, “Obsequies vpon the Lord Harrington the last that dyed”における観察者とその道具

奈良女子大学助教 奥西豊子

2. A Priest in *The Temple*——ハーバートの宗教詩における「見える」ものと「見えざる」もの

神戸市外国語大学教授 西川健誠

司会 同志社大学教授 勝山貴之

3. ジェームズ朝期イングランドのエフェソス像と『ペリクリーズ』における領主の法的役割

成城大学大学院生 松岡英資

4. 【招待発表】ヨーロッパ大陸における『ジュリアス・シーザー』の受容と経由点としてのアディソン

甲南大学教授 杉浦裕子

第 2 室（社会学部棟 3 階 社 301 教室）

司会 奈良女子大学教授 齊藤美和

1. マーガレット・キャヴェンディッシュと虚数——*Poems and Fancies*（1653）の脳と蜘蛛についての詩を事例に

関西学院大学大学院生 谷村弥紀

司会 同志社大学教授 下楠昌哉

2. *The Absentee* における informer の役割——共同体における「密告」

関西学院大学大学院生 樽磨早紀

司会 京都大学国際高等教育院副教育院長 廣野由美子

3. 【招待発表】トマス・ハーディの小説・詩とE・ブロンテ『嵐が丘』にみる幽霊／幻影
——バラッド、フォークロア、ホームというイングリッシュネス

西南学院大学名誉教授 金子幸男

司会 関西大学教授 高橋美帆

4. *The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs* における理想世界の構築

大阪公立大学准教授 清川祥恵

第3室（社会学部棟3階 社302教室）

司会 立命館大学准教授 庄子萌

1. 「女性同士の絆」からこぼれ落ちる女性——Caryl Churchill の *Fen* を対象に

大阪大学大学院生 奥川瑞穂

2. ハロルド・ピンター『管理人』における暴力の交差

神戸大学大学院生 阿部万里亜

司会 京都大学准教授 南谷奉良

3. *A Pale View of Hills* に見る母娘関係

京都産業大学講師 陳懌懿

4. *The Voice of the Warren: Oral Tradition and Collective Psychology in Watership Down*

近畿大学工業高等専門学校専任講師 チョシュコヴィチ・イリーナ

第4室（社会学部棟3階 セミナールーム）

司会 大阪大学講師 近藤佑樹

1. *The Fantasy of Ontological Security in Philip K. Dick's The Divine Invasion*

神戸大学大学院生 PARK Junghwan

司会 神戸大学准教授 平川和

2. *Ratner's Star* における〈失われた歴史〉の発掘——Maurice Wu と 1970 年代米中和解

追手門学院大学常勤講師 王立琚

司会 京都府立大学教授 出口菜摘

3. Ocean Vuong の *On Earth We're Briefly Gorgeous* における修辞としての句読点

奈良県立大学准教授 桑原拓也

司会 相愛大学名誉教授 山下昇

4. 【招待発表】『土にまみれた旗』再読——パイロン・スノープスを中心に

京都女子大学教授 金澤哲

第5室（社会学部棟3階 セミナールーム2）

司会 龍谷大学教授 五十嵐海理

1. 状態変化動詞の自他交替と尺度の測定基準

関西学院大学准教授 吉本真由美

2. 動詞 *toss* の語彙意味論

神戸学院大学教授 出水孝典

司会 京都女子大学准教授 谷光生

3. 英語の後置属格の派生と解釈——Box 理論による再検討

関西学院大学教授 茨木正志郎

4. 【招待発表】英語の子音過程の生起条件をめぐって

桃山学院大学教授 南條健助

シンポジウム 15:10～17:30

英米文学部門（社会学部棟2階 社201教室）

人文学に何ができるか——文学からの応答(リスポンス)

司会・講師	大阪大学教授	小杉世
講師	早稲田大学教授	岡真理
講師	関西学院大学教授	高村峰生
講師	龍谷大学講師	三宅一平

英語学部門（社会学部棟3階 社301教室）

レトリックと言語の諸相

司会・講師	大阪大学教授	大森文子
講師	関西学院大学専任講師	福本広光
講師	立命館大学准教授	後藤秀貴
講師	関西外国語大学教授	渡辺秀樹

総会 17:30より（社会学部棟2階 社201教室）

閉会式 17:50より（社会学部棟2階 社201教室）

挨拶 日本英文学会関西支部副支部長 芦津かおり

懇親会 18:20より

（関西学院会館で開催。詳細、及び会費については9月末に関西支部HPに掲示します。）

研究発表要旨

第1室（社会学部棟2階 社202教室）

第1発表（11:10より）

司会 関西外国語大学講師 友田奈津子

“I comprehend All, in those mirroures of thy way and end” ——John Donne, “Obsequyes vpon the Lord Harrington the last that dyed”における観察者とその道具

奈良女子大学助教 奥西豊子

ジョン・ダン（John Donne, 1572-1631）の「ハリントン卿への挽歌」（“Obsequyes vpon the Lord Harrington the last that dyed”）は、ダンのパトロネスであったベッドフォード伯爵夫人の弟ジョン・ハリントンが、1614年2月に21歳の若さで亡くなった際に書かれた挽歌である。258行ある本詩は、ダンの挽歌において『周年追悼詩』（*Anniversaries*, 1612）に次ぐ長編詩である。本詩は、作品全体に科学への言及がみられ、望遠鏡や懐中時計など当時最先端の道具を象徴的に用いることで知られる。早世したハリントン卿を「尺度」として不十分だとする描写や、追悼対象の卿がヘンリー皇太子の腹心の友であったことから、本詩には、技術革新に高い関心を寄せた皇太子と卿に対する、ダンの批判的心情が反映されていると指摘されてきた。一方で、ダンが聖職に就く前年に書かれた本詩が、彼の宗教的思索を多分に含むことにも注目すべきである。本発表は、「ハリントン卿への挽歌」における、様々な道具の描写とそれを用いる人間のあり方に着目することで、ダンの宗教的「観察者」としての自己表明を考察する。

第2発表（11:55より）

A Priest in *The Temple*——ハーバートの宗教詩における「見える」と「見えざる」もの

神戸市外国語大学教授 西川健誠

ジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）の詩集『教会』（*The Temple*）には、聖職者としての自らを省察した詩群がある。これは、同じく *The Temple* を名称に含む聖職生活手引書『田舎牧師』（*A Priest to the Temple: Or The Country Parson: His Character and Rule of Holy Life*）もある彼らしい。抒情詩という「私」的器の中で聖職という「公」職への資質が省察され、かつしばしば教会内のオブジェがその省察の契機となっているのだ。本発表はこの観点から“The Altar”, “The Windows”, “The Cross” 及び “Aaron”を精読する。これらの詩中で、「見えざる」故に尊い筈の「私」的内面に潜む問題性を意識させるものとして、「公」的で「見える」ものに相対的に価値が付与されている様を示す。

第3発表（13:30より）

司会 同志社大学教授 勝山貴之

ジェームズ朝期イングランドのエフェソス像と『ペリクリーズ』における領主の法的役割

成城大学大学院生 松岡英資

本発表は『ペリクリーズ』におけるタイアの領主ペリクリーズとミュティレネの太守ライシマカスの政治的・法的態度に着目する。ペリクリーズは政治判断において一貫して忠臣ヘリカーヌスに助言を仰ぐ。また、

アンティオカス王の脅威に際して、自身の主権維持よりも公共の利を優先して、民を守るために国を離れる。飢饉に苦しむタルソスには無償で穀物を提供し、契約や法的な約束を求めない。ライシマカスも、配下の貴族の提案を受け入れ、来航したペリクリーズに対する歓待役を、民として同等の権限があると認めるマリナーナに委任する。ペリクリーズの船団には無償で食糧を供給する。発表ではこうした民主的な執政や、個人の利益のための契約手続を回避する姿勢が、初期近代において受容された古代ギリシア都市国家としてのエフェソス像がもつ政体と法制度に由来することを、トマス・ニコルズが英訳した『戦史』(1550)を援用して明らかにする。また領主らの特質が、星室庁裁判所や王座裁判所といった当時のイングランドの法体制を批判する役割を持っている点を検証する。

第4発表(14:15より)

【招待発表】ヨーロッパ大陸における『ジュリアス・シーザー』の受容と 経由点としてのアディソン

甲南大学教授 杉浦裕子

18世紀に入ると、シェイクスピアの名はフランス・ドイツ・イタリア・スイスなどの知識人の中で徐々に広まるが、その過程で『ジュリアス・シーザー』は、とりわけ早くから論じられ、翻訳され、翻案された劇の一つである。そこにはいわゆる「シーザーもの」の劇が16世紀以来、ヨーロッパのあちこちで書かれ続けてきた背景もある。本発表では、ジョゼフ・アディソンが書いた悲劇『カトー』(1712)が古典主義者たちから模範的とされた一方で、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』がどう受け止められどう書き換えられてきたのか、また「専制対自由」というテーマの18世紀的意義について、フランスを中心に他の国も若干射程にいれながら分析する。そして、『スペクテイター』誌によってシェイクスピアの名を諸国に広めたアディソンが、18世紀のヨーロッパ大陸の知識人たちによるシェイクスピア受容の「経由点」として果たした役割と影響を考察する。

第2室(社会学部棟3階 社301教室)

第1発表(11:10より)

司会 奈良女子大学教授 齊藤美和

マーガレット・キャヴェンディッシュと虚数 ——*Poems and Fancies* (1653) の脳と蜘蛛についての詩を事例に

関西学院大学大学院生 谷村弥紀

本発表では、以前からマーガレット・キャヴェンディッシュ(1623~1673)の先行研究者間で論じられてきた、彼女の作品に関わる議論の「揺れ」なるものを再検討すべく、いわゆる文系・理系の枠組みを超えてキャヴェンディッシュの世界観を捉え直す。16世紀イタリアで誕生した想像上の数を示す虚数並びに実数と合わせた複素数の概念では、図形の拡大や回転といった幾何学的な問題が扱われるが、キャヴェンディッシュも例えば脳(“*The Circle of the Brain cannot be Squar'd*”)や蜘蛛(“*Of the Spider*”)の詩などで、そうした考え方を作品の構想に取り込んでいたとの見方もできよう。殊に男・女や単数・複数といった二項対立を超越する仕様について推察し、彼女の議論にみられる「揺れ」の思想的な背景となり得た自然科学理論と彼女の詩的表現との関連性について解き明かす。

第2発表 (11:55 より)

司会 同志社大学教授 下楠昌哉

The Absentee における informer の役割——共同体における「密告」

関西学院大学大学院生 樽磨早紀

アイルランドの女性作家 Maria Edgeworth の小説 *The Absentee* (1812) は、不在地主の一族を主題とし、ロンドンでの社交生活とアイルランドへの帰住を描いた作品である。作中では、人々が情報をやりとりする様子が繰り返し描かれる。ロンドンにおいては、それは主に社交界内部における噂や悪評の流布として描かれるのに対し、アイルランドにおいては、共同体内部の秘密を外部へ漏らす informer、すなわち「密告者」が描かれる。作中において「密告」は明確に悪とされ、密告を促す法律もまた悪法として示されており、アイルランドの人々はそれをかいくぐろうとする。物語の終盤では、主人公 Lord Colambre が、最愛の人 Grace Nugent の出生をめぐる不名誉な疑いを、アイルランドで出会った Lady Dashfort からほめかされるが、この告げ口は、結果的に Grace の出生をめぐる秘密を明らかにし、二人の結婚を可能にする契機となる。本発表では、*The Absentee* における情報のやりとり、秘密の共有、密告の描写に注目し、それらが作品全体の構造においてどのような機能を果たしているのか、また結婚という展開にどのように関わっているのかを考察する。

第3発表 (13:30 より)

司会 京都大学国際高等教育院副教育院長 廣野由美子

【招待発表】 トマス・ハーディの小説・詩と E・ブロンテ『嵐が丘』にみる幽霊／幻影
——バラッド、フォークロア、ホームというイングリッシュネス

西南学院大学名誉教授 金子幸男

ヴィクトリア朝時代は幽霊物語が多数書かれ、フォークロアへの関心が高まった時代で、1878年にはフォークロア協会が設立されている。本発表はイングランドの田舎に根をおろした作家トマス・ハーディとエミリー・ブロンテにおける幽霊とナショナル・アイデンティティの問題を扱う。前者の小説や(劇)詩の中には、幸不幸を暗示しながら超自然の存在、幽霊／幻影が村のコテッジや農家屋、田舎町、イン、牧草地、樹木、教会、墓地、丘、川、海外植民地などに出没するものがあり、バラッドの影響を受けている。それらは村落共同体に帰属し、過去と現在とをつなぎ、ホームを強く意識させるイングリッシュな存在である。世紀末のハーディよりもおよそ100年前の時代設定の幽霊話、『嵐が丘』(1847)もフォークロア、特にバラッドの影響を強く受けている。しかしヘースクリフとキャサリン(の幽霊)はホームとなり得る、嵐が丘とスラッシュクロスの両屋敷には背を向けており、ハーディとは正反対である。帰属意識を持たない幽霊の話をナショナルな物語と言えるのかどうか。時代も内実も異なる二作家の幽霊話は19世紀におけるいかなる社会の変化をもの語るものであろうか。

第4発表 (14:15 より)

司会 関西大学教授 高橋美帆

The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs における理想世界の構築

大阪公立大学准教授 清川祥恵

William Morris (1834-96) の *The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs* (1876) は、当時東方面

題に関心を寄せ、古建築物保護協会での活動に奔走するなど、政治志向をつよめていたとされる Morris が、その一方で遠い時代の物語を語ることにいかなる意義を見いだしたのかを解明する上で手がかりとなるものである。自らの作品のうちでも本作を最も高く評価し、後世に残るよう望んだとされることから（May Morris, *Collected Works of William Morris* 12: xxiii）、後の文学作品で前景化するユートピア世界の素描として本作を読むことは重要であると考えられる。本発表では、翻訳そのものの妥当性ではなく、モリスがサガの世界のなかに何を投影したのかを検討することで、詩人が「中世」の神話のなかに見た、「実現すべき理想」を明らかにすることを目指す。

第3室（社会学部棟3階 社302教室）

第1発表（11:10より）

司会 立命館大学准教授 庄子萌

「女性同士の絆」からこぼれ落ちる女性——Caryl Churchill の *Fen* を対象に

大阪大学大学院生 奥川瑞穂

本発表では、現代イギリス劇作家 Caryl Churchill の戯曲 *Fen* (1983)を対象に、「女性同士の絆」の限界と、そこから排除された女性が果たす機能について考察する。既存の「女性同士の絆」に関する研究は、女性同士の連帯や親密性の可能性に焦点を当てる傾向が強く、排除や競争といった否定的側面は十分に論じられてこなかった。本発表は、この側面に焦点を当てる。

Fen はイギリスの田舎の沼地を舞台とし、女性たちが農業労働と家庭内労働に明け暮れる姿を描く。農業に従事する女性たちのコミュニティ内で、権力者に反抗する Nell や、自身の欲望を追い求める Val は同僚女性たちから疎まれる。しかし、この2人はむしろ、周囲の女性たちが押し殺している感情や感覚をすくいあげる存在として機能している。本発表は、「女性同士の絆」から排除された女性は、自身が排除された絆のコミュニティ内で女性たちが抑え込んでいる欲望を明確化し、彼女たちを解放に導く存在であることを示す。

第2発表（11:55より）

ハロルド・ピンター『管理人』における暴力の交差

神戸大学大学院生 阿部万里亜

ハロルド・ピンターの『管理人』(*The Caretaker*, 1960) は、浮浪者 Davies、彼を部屋に招いた Aston、その弟の Mick という三人の関係性の変化を描いた劇である。劇の背景には二つの暴力がある。一つ目は排除の暴力である。移民嫌いのホームレスである Davies はこの暴力の加害者と被害者の両方の側面を持っている。二つ目が医療の暴力である。Aston は自らの意思に反して精神病院に収容され、治療された過去を抱えている。

本発表では登場人物の相互理解の困難が、彼らが受けた暴力の体験に起因していることを論じる。まず、過去の記憶が現在のものの見方の違いを生み、彼らの相互理解を妨げていることを示す。次に彼らが自らの状況の改善を試みた結果、暴力の連鎖と Davies の排除という結末を迎えることを示す。ピンターは『管理人』を通して多様な暴力が同時に機能する世界において弱者／強者、加害者／被害者は単純に二分できるものではなく、局面や視点によって変化することを提示しているのだ。

A Pale View of Hills に見る母娘関係

京都産業大学講師 陳憚懿

Kazuo Ishiguro の *A Pale View of Hills* (1982) は、イギリスに住む日本人女性 Etsuko が戦後長崎での過去を回想する形で語られる作品である。本発表では、陳憚懿 (2023) が指摘した Etsuko=Sachiko、Keiko=Mariko という対応関係を前提とし、Etsuko の渡航の決断と Keiko の悲劇の関係を母娘関係の観点から考察する。具体的には、Etsuko の渡航に見られるトラウマからの離脱と自己再構築、母と娘の認識のずれ、母性の複雑性という三つの観点から分析を行い、Ishiguro が本作品において母娘関係をどのように描いているのかを検討する。Etsuko の渡航には、戦争による喪失から離れ、新たな人生を築こうとする意識と、娘に良い未来を与えたいという思いが存在していた。一方で、娘の主体性は十分に尊重されず、母の愛情や善意が結果として子どもの主体性を抑圧する側面も見られる。また、本作の母性には、愛情と母としての責任、自らの欲求が併存している。以上から、Ishiguro は本作を通して母性の複雑性を描くとともに、愛情と主体性の葛藤を通して、親の愛情と子どもの幸福が必ずしも一致しない現実を提示していることを論じる。

The Voice of the Warren: Oral Tradition and Collective Psychology in *Watership Down*

近畿大学工業高等専門学校専任講師 チョシュコヴィチ・イリーナ

This study examines oral tradition in Richard Adams' *Watership Down* (1972), arguing that the dominant forms of oral discourse within each rabbit society express and shape its collective psychology. Drawing on Bakhtin's concept of speech genres, it explores how the distinctive "voice" of each warren reflects different relationships between memory, identity, and survival. Through a comparison of Sandleford, Cowslip's Warren, Efrafa, and Watership Down, the paper analyzes how ritualized heroic tales, lyric poetry, bureaucratic discourse, and renewed legend-making embody contrasting modes of communal life. Ultimately, it shows that storytelling functions as both a diagnostic and a regenerative social practice, fostering resilience through the continual renewal of tradition.

第4室 (社会学部棟3階 セミナールーム)

The Fantasy of Ontological Security in Philip K. Dick's *The Divine Invasion*

神戸大学大学院生 PARK Junghwan

The Divine Invasion (1981), the second work in American science fiction author Philip K. Dick's (1928-82) theological VALIS trilogy, occupies an anomalous position in his oeuvre by depicting his theological concerns in their most direct and affirmative form, at an aesthetic and literary cost. This paper reads the novel's God figure, Yah, as a final guarantor whose intervention exposes the impossibility of reality's secular or immanent stabilization. The novel grants ontological security, but only through the direct intervention of a literalized *deus ex machina*. Thus, its wish-fulfilling, God-given stability suggests that reality can gain its consistency only through the violent intervention of an external, divine authority.

第2発表(11:55より)

司会 神戸大学准教授 平川和

Ratner's Star における〈失われた歴史〉の発掘——Maurice Wu と 1970 年代米中和解

追手門学院大学常勤講師 王立琚

Ratner's Star (1976) は、哲学的・ポストモダンの側面から広く論じられてきた一方で、1970 年代における米中関係の変容という政治的文脈との関わりについては、これまで十分に検討されてこなかった。本発表は、1970 年代の米中関係をめぐる政治的変容へのドン・デリーロの認識が、本作に反映されていることを論じるものである。本作に関するアーカイブ資料の分析を通じて、中国文化に強い関心を抱き、米中科学協力を推進する組織に所属する中国系アメリカ人考古学者 Maurice Wu という登場人物が、1970 年代アメリカの文化的・政治的状况を色濃く反映していることを明らかにする。この時期、アメリカ中心主義は批判の対象となる一方で、米中関係は和解へと向かいつつあった。本発表は、このような歴史的な文脈の中に *Ratner's Star* を位置づけることで、冷戦期における米中関係の変容がアメリカ文学の言説のなかでどのように表象されているのかを明らかにする。

第3発表(13:30より)

司会 京都府立大学教授 出口菜摘

Ocean Vuong の *On Earth We're Briefly Gorgeous* における修辞としての句読点

奈良県立大学准教授 桑原拓也

ベトナム系アメリカ作家 Ocean Vuong による自伝的長編小説 *On Earth We're Briefly Gorgeous* は、書くという行為がいかに私たちの生と政治性を規定するのかを主題のひとつとしている。文字を読むことができない母に宛てた手紙形式の本作品で重要となる要素は、読まれえない相手に対する呼びかけである。この呼びかけを分析するために、本発表は、Barbara Johnson による論文 “Apostrophe, Animation, and Abortion” を重要な参照項として位置づける。Johnson は、apostrophe を、現前しない他者に対する呼びかけによって、その対象を生命あるものとして立ち上げる修辞として論じた。他方で Vuong は、comma と period という通常は文法的・統辞的な機能を担う句読点に、胎児や傷、継続、停止をめぐる比喩的な意味を与えている。本発表は、比喩的な意味を与えられた句読点に注目することで、Vuong の小説が書くことの政治性をいかに問い直しているのかを明らかにする。そうすることで、しばしばエスニック文学やクィア文学の枠組みで読まれる本作品が、理論的射程を有していることを示す。

第4発表(14:15より)

司会 相愛大学名誉教授 山下昇

【招待発表】『土にまみれた旗』再読——バイロン・スノープスを中心に

京都女子大学教授 金澤哲

ウィリアム・フォークナー(1897-1962)の第3作『土にまみれた旗』(*Sartoris*, 1927/*Flags in the Dust*, 1973, 2006)は、ヨクナパトーフ・サーガ第1作であり、従来、サートリス家とベンボウ家の運命を描いた物語として理解されてきた。その後、フォークナーはコンプソン家、サトペン家などの没落の悲劇を書き続けることになる。

一方、この作品を書き始めるとき、フォークナーにはもう一つの可能性も見えていた。それは最終的にスノープス三部作に至る道であり、「プア・ホワイト」に属するスノープスたちがジェファソンの町を支配していく過程を、喜劇的・風刺的に描くものである。

本発表では、これまで主に「名家」の物語として理解されてきた『土にまみれた旗』を、上記二つの可能性が交錯する作品として読み直してみたい。特にパイロン・スノープスに注目し、創作上の岐路に立っていた作家の姿を読み解くとともに、「名家」没落の悲劇にとどまらない、ヨクナパトーフア世界の多面性を指摘したい。

第5室（社会学部棟3階 セミナールーム2）

第1発表（11:10 より）

司会 龍谷大学教授 五十嵐海理

状態変化動詞の自他交替と尺度の測定基準

関西学院大学准教授 吉本真由美

本発表は、状態変化動詞の自他交替の可否と、動詞句が構築する尺度の測定基準との関連を検討する。従来、自他交替は外的・内的要因、使役者の関与、*affectedness* 等の観点から論じられてきた。本発表では、従来の分析を踏まえつつ、*degree modification* が可能な状態変化動詞を対象に、状態変化を測る尺度が Theme のどのような属性に基づいて構築されるのかという点に着目する。そして、測定対象となる属性が Theme に応じて安定して定まるかという観点から動詞句を分類し、温度や構造的完全性のように測定対象が比較的安定する動詞句と、*destroy* や *devastate* のように測定対象が Theme や文脈に依存する動詞句を比較する。本発表では、測定対象が安定して定まる動詞句ほど自他交替が成立しやすいという予測を提示し、その妥当性を検討する。

第2発表（11:55 より）

動詞 *toss* の語彙意味論

神戸学院大学教授 出水孝典

動詞 *toss* は「A に B を送る」を表す動詞グループに含まれ、*Mark tossed Simon the car keys./ Mark tossed the car keys to Simon.* のように、間接目的語形と *to* 形両方で用いられる。意味的には、瞬間的・完結的というアスペクト特性を有し、動作主である人が主題の所有状態を失うことで完結性が生じている。しかし *toss one's head*（頭をそらす）のような語義や、無生物を主語とする他動詞用法とその自動詞用法などもあり、どう説明するかが課題となる。本発表では、*OED*² の記述、特に中心義の定義にある *without any notion of agitation* を手がかりに、*agitation* を有する語義が原義であり、状態変化を含意せず持続的・非完結的のアスペクトをもつこと、それが受動的、再帰的に再解釈された語義もあることを、今日の語彙意味論研究と関連付けながら論じる。

英語の後置属格の派生と解釈——Box 理論による再検討

関西学院大学教授 茨木正志郎

英語の後置属格 (a friend of mine, that nose of his 等) は、一見すると部分構文や同格的な of 構文と近い性質を示すが、その解釈や分析をめぐっては、これまでに様々な検討がなされてきた。Jackendoff(1977)や Barker (1998)などは、後置属格を部分構文との関連から分析した一方で、Lyons(1986)は後置属格を部分構文とは区別すべきであると主張している。また、Jespersen (1927)や Taylor (1996)などに見られるように、後置属格を同格的な of 構文との関連から捉える見方も提示されている。本発表では、これらの先行研究を検討し、不定冠詞タイプと指示詞タイプの解釈の違いに注目しながら、後置属格の記述的特徴を整理する。そのうえで、所有者と被所有物の関係がどのように形成され、主要部名詞と後置された属格句がどのように解釈されるかを考察する。具体的には、Chomsky (2024)の Box 理論を名詞句領域へと拡張し、所有関係は名詞句内部の低い位置で形成されると考える。そして、高いフェイズにおいて、ボックス化された被所有物が焦点解釈に利用され、外在化されると分析し、後置属格の派生と解釈に説明を与えるを試みる。

【招待発表】英語の子音過程の生起条件をめぐって

桃山学院大学教授 南條健助

本発表では、英語の様々な子音過程の生起条件を音声学と音韻論の両面から考察する。具体的には、英語の諸方言で見られる無声閉鎖音の帯気化、/t/ の有声化・弾音化や声門化 (glottalisation)・声門閉鎖音化 (glottalling)、/l/ の軟口蓋化・咽頭化や母音化、/r/ の消失、/t, d/ の脱落、音節主音的子音形成などを取り上げ、これらの現象がなぜ特定の条件下で生じるのか、また、なぜ特定の条件下では生じないのかについて、分節音的条件、韻律構造、および調音的・知覚的要因などの観点から明らかにする。その中で、無声子音の後で生じる /t/ の有声化や、母音の前で生じる /t/ の声門閉鎖音化など、従来の英語音声学の記述からすれば例外的と思われる現象も取り上げ、これらの現象はどのように説明できるかについても論じる。

シンポジウム要旨

英米文学部門（社会学部棟2階 社201教室）

人文学に何ができるか——文学からの応答(リスポンス)

司会・講師	大阪大学教授	小杉世
講師	早稲田大学教授	岡真理
講師	関西学院大学教授	高村峰生
講師	龍谷大学講師	三宅一平

全体のねらい

カメルーン出身の歴史哲学者・政治理論家であるアシル・ムベンベ（Achille Mbembe）が『ネクロポリティックス』で述べる「デモクラシーの暴力 (the brutality of democracy)」, 帝国の「夜の顔」がこれまで以上に剥き出しになった近年の世界情勢において、人文学に何ができるのかという根本的な問いを考えることは、現在を生きる我々の切実な応答責任となっている。このシンポジウムは、気候変動、環境問題、難民、紛争、核の軍事植民地主義などグローバルな課題へのリスポンスとしての文学や芸術のもつ力と可能性について、他者に向けた文学的想像力の果たす社会的機能について考察する。繰り返されてきた植民地主義の歴史を踏まえながら、トランスナショナルな視座から、また人間以外の種も含む視点から、異なる文化と歴史の折衝点において、困難な時代を生きる我々の共生のための方途を模索する。

文学者の使命——ジェノサイドの只中で文学を生きるということ

早稲田大学教授 岡真理

かつてサルトルは、アフリカで子どもが飢えているとき、『嘔吐』は無力であると語った。では、パレスチナでパレスチナ人の命が虫けらほどの価値もないかのように日々奪われているとき、文学にいかなる力があるのか。第二次インティファダ以来、それは、パレスチナ文学に関わる私自身の実存的問いとなった。アサド政権下のシリアで政治犯として獄にあった老作家は言う——「いいか、文学に世界を変えられるなどと思うな。文学にそんな力などない」と。2023年10月7日以来、パレスチナのガザ地区では、紛れもないジェノサイドが進行している。世界の眼前で、何憚ることなく。ガザの、地平線まで続く瓦礫の荒野の下で砕け散っているのは、私たちが「ヒューマニティ」と呼ぶものにほかならない。このジェノサイドの只中であって、文学者であるとは何を意味するのか。文学が世界を変え得ないのなら、ジェノサイドを生きる当事者たちが、それでもなおこの例外状況のなかで文学作品を紡ぎ続けるのはなぜなのか。そして、その文学は、非当事者である私たちに何を要求しているのか。

Louise Erdrich と Kim Stanley Robinson のディストピア小説における「未来」の危機と管理

関西学院大学教授 高村峰生

SF が明るい「未来」を描くことが出来なくなったことは、21 世紀におけるディストピア小説の流行と密接に関連している。フレデリック・ジェイムソンは『未来の考古学』において、ユートピアの理論的・系統的な考察を行い、「未来」へのユートピア的想像力を政治的変革への衝動と結びつけた。しかし、近年のパンデミック、政治的分断、経済格差、技術の崩壊、気候変動、人口減少などのグローバルな問題は、「未来」という概念そのものが危機に瀕していることを示している。本発表では、人類の退化によって出生が国家に厳しく管理される社会を描いた Louise Erdrich の *Future Home of the Living God* (2017)、および未来世代の利益を代表する国際機関を中心に、気候危機への対応を描いた Kim Stanley Robinson の *The Ministry for the Future* (2020) を取り上げ、これらの作品が未来の喪失をどのように描いているかを分析し、その内部になお残されているユートピア的契機や、新たな未来の可能性がいかにかに提示されているのかを考察したい。

重なり合う世界から——Greg Egan の *Quarantine* における蓋然性操作の論理/倫理

龍谷大学講師 三宅一平

本発表の取り上げる Greg Egan の *Quarantine* (1992) が主題のひとつに取り上げるのが、量子力学における波動関数の収縮である。「観測」によって重ね合わせの状態がひとつの事象に収縮するわけだが、Egan はここに SF 的想像力を発揮する—重ね合わせの世界の中から、特定の固有状態を選び出せる能力があるとすれば、三十余年の時を経て本作を読み直すとき、ここに「ポスト・トゥルース」的な世界の支配の予兆を読み込むことは難しくない。本作はカルト宗教、脳機能操作など、世界の見え方を変えてしまうギミックに満ちている。さらに言えば、最終的に収縮阻害によって拡散し続ける破局を目前にする本作の舞台「新香港」は、豪州から独立した先住民族連合が、香港からの政治的難民に土地を提供して建国された場である。重なるのは概念的な可能世界ばかりではない。本発表は、こうした「世界」の支配に注目することで、「文学」に何ができるかを、ひいては、文学的「想像力」に何ができるかをしるのかを問うものである。

太平洋島嶼部の詩人とオーストラリア先住民作家による気候変動と核汚染の表象 ——Haunani-Kay Trask と Alexis Wright を中心に

大阪大学教授 小杉世

2023 年 10 月のイスラエルによるガザ侵攻以降、世界の先住民の間にみられるパレスチナへの連帯運動が注目されている。その核心にあるのは移住者植民地がはらむ暴力性、すなわち、植民地化の過程で行われた虐殺や土地の収奪、現在も続く軍事植民地主義への批判などである。ハワイの先住民詩人であり活動家であった Haunani-Kay Trask は、2004 年のエッセイで、冷戦終了後も続く太平洋の軍事植民地化の人と環境への影響を Fanon の言葉を借りて「平和的暴力(peaceful violence)」と呼んだ。オーストラリアの中国系先住民作家 Alexis Wright の未来小説は、オーストラリア北部カーペンタリア湾岸地域を中心とする土地に根差しながら、太平洋島嶼部のマーシャル諸島やグアム、ハワイ、キリバスなどと共通する気候変動、パンデミック、難民、核軍事植民地主義による環境汚染という問題と呼応する世界を描いている。環礁と砂漠という 2 つの異なるバイオ・スフィアを超えて、太平洋島嶼部にルーツをもつ詩人たちの作品とオーストラリアの先住民作家 Alexis Wright の小説 *The Swan Book* (2013)、*Praiseworthy* (2023) にみる近未来世界が共通して描く要素を分析する。

レトリックと言語の諸相

司会・講師	大阪大学教授	大森文子
講師	関西学院大学専任講師	福本広光
講師	立命館大学准教授	後藤秀貴
講師	関西外国語大学教授	渡辺秀樹

シンポジウムのねらい

言葉には力がある。言葉を巧みに用い、美しく効果的に表現することで、人の心を動かし、説得することができる。その力は古来レトリックと呼ばれ、レトリックの技法の整理および体系化の試みは、紀元前のギリシアにまで遡る。

その歴史の長さゆえに、レトリックは、古びた学問と見なされたこともあったが、現代に至り、レトリックに新たな光が当てられることになった。人の心に訴えかけ、感動を与える言葉の力の背後には、人間の精神の仕組みがあり、その仕組み自体の中にレトリック的な思考法、発想法があるという観点からの研究である。かくして、レトリックは今、人文科学の様々な分野において、人間の精神活動の重要な側面に深く関わる現象として理解され、大きな関心を集める研究対象となっている。

本シンポジウムでは、表現技法としてのレトリック、思考法としてのレトリックの両方を考察の対象とする。特定の語法や、言語社会の中で慣用化された成句、言葉のもつ音韻的象徴、メタファー表象といった言語の諸相に着目しながら、レトリックの力を探究したい。

語法のレトリック——米国大統領演説における分離不定詞の強調効果とリズム

関西学院大学専任講師 福本広光

本発表は、米国大統領による演説に現れる分離不定詞（*to*+副詞類+動詞原形）を語法上のレトリックとして捉え、その意味上の強調効果を中心に、音声上のリズムとの関係を検討する。政治的演説における語順選択は、政策内容を伝達するだけでなく、聞き手にどの語句をより強く印象づけ、どこに意味の焦点を置くかを調整する働きをもつ。とりわけ、副詞類が *to* と動詞の間に置かれることで、動作の程度・様態、判断の姿勢、政策目標の達成や推進といった意味が前景化される場合がある。本研究では一般教書演説のデータに基づき、分離不定詞が単なる語順の選択ではなく、政策行為の意味づけを調整する表現資源として機能する可能性を、実例の分析を通して考察する。個々の用例が置かれた演説文脈にも配慮しながら、副詞類の意味タイプや動詞との結びつきに目を向け、意味上の強調が発話上の強勢やリズムの流れによってどのように支えられうるかを探る。

成句のレトリック——日英語の身体部位詞の意味拡張

立命館大学准教授 後藤秀貴

「胸が張り裂ける」や *break one's heart* など、複数の語が慣習的に結びついて特定の意味を担う表現（本発表ではこれらを総称して「成句」と呼ぶ）の多くは、構成語の意味の総和に還元できない意味をもつ。本発表では、身体部位を指す語（身体部位詞）を含む日英語の成句を対象に、その意味拡張のあり方を対照言語学的観点から検討する。身体部位詞は、しばしば本来の身体的意味から感情・思考・性格といった精神活動に関わる意味へと拡張するが、その拡張を動機づけるのがメタファー・メトニミーをはじめとする比喻（レトリック）である。本発表では、身体部位詞を含む成句を成立させる比喻の働きに注目し、認知言語学の枠組みから、それらの比喻が単独あるいは複合的にいかに介在しているかを分析する。その上で、こうした比喻の構造に日英語でいかなる共通点と相違点が見られるのかを示し、その異同を身体的・文化的要因の観点から考察したい。

音韻のレトリック——英詩に見える主題音分散の効果

関西外国語大学教授・大阪大学名誉教授 渡辺秀樹

白秋の「咳すれば寂しからしか軒端より雀さかさにさしのぞきをする」という歌の中には、サ行音が 10 回出て来るが、意図的か無意識か、いずれにせよこれらにより「さびしさ」が際立つ。その感情の表象が雀と咳である。日本の詩歌の音象徴の効果は誰も無意識に感じているはずで、英詩における同様の音韻効果について、英詩概論・作品研究という講義の中でここ数年、音韻効果と主題の関係について学生に説明しながら、自ら気付いてきた事柄をいくつかお話ししたい。Wordsworth と Robert Herrick の比較、William Blake の『無垢の歌』と『経験の歌』の代表的作の比較から、確かに音象徴の存在を示してから、Shakespeare のソネットの音韻的に興味深い篇を取り上げる。

音韻効果には頭韻・脚韻だけでなく母音韻 (assonance) や子音韻 (consonance) も含め、詩の主調となる感情（を表す語）やタイトル名に含まれる特徴的な音が詩中の語の中で散りばめられ、繰り返し響くことにより強調される様相を見て行く。こうした音象徴を分類する術語にも触れる。

表象のレトリック——シェイクスピアのソネット集の隠されたメタファー

大阪大学教授 大森文子

Shakespeare の *Sonnets* は 154 篇のソネットから成り、そのうち 1 番から 126 番までは、美しい青年を愛する詩人の思いを描いたものである。これらの詩では、詩の語り手と青年の愛憎相半ばする複雑な関係と、それゆえに語り手が味わう喜び、希望、悲しみ、恐れ、嫉妬、相手を守り抜く決意と矜持といった様々な心情が語られる。この詩群を連作として読むと、青年に対する一定のメタファー思考が詩の表現に反映されていることが見えてくる。そのメタファー思考は、詩の中にメタファー表現として明示的に表されている場合もあれば、表現レベルでは明確には示されず、隠された表象として暗示され、詩群の多様な表現様式の中にそのヒントがちりばめられている場合もある。詩の中に用いられた語や文法形式、詩人の詩作態度に至るまで、様々なレベルのヒントを拾い上げ、Shakespeare による *Sonnets* 以外の詩も参照しながら、詩群の中に隠されたメタファーを探り、青年の表象と詩人の愛の特徴を浮き彫りにしたい。

大会準備委員

委員 長：合田典世（京都大学）

副委員 長：馬淵恵里（大阪大学）

英文学部門委員：

合田典世（京都大学） 杉村醇子（阪南大学） 馬淵恵里（大阪大学） 吉村征洋（龍谷大学）

米文学部門委員：

出口菜摘（京都府立大学） 三宅一平（龍谷大学）

英語学部門委員：

五十嵐海理（龍谷大学） 谷光生（京都女子大学）

開催校委員：

松宮園子（関西学院大学）

（五十音順、敬称略）